

「VONORE (RA)」を巡って

市井外喜子

A Study of “VONORE(RA)”

Tokiko ICHII

1. はじめに

『天草版平家物語』には、対称詞 vonore8 例・vonorera4 例が用いられている。この vonore (ra) の対称詞を、古典平家九本と比較し、天草版平家・古典平家間の vonore (ra)・己 (等) および汝 (等) を吟味することにした。

『天草版平家物語』は、1592 年イエズス会天草学林から出版され、原本名を「日本の言葉と Historia を習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語。(FEIQE NO MONOGATARI)」とするものである。

それは聞き手兼進行役をつとめる右馬の允 (VM.) と、話し手の喜一検校 (QL.) が「兩人相對して雑談をなすがごとく」にとの編纂目標にしたがって、「検校の坊、平家の由來が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ」と右馬の允が請い、喜一が「やすいことござる：をうかた語りまらしょうず。」と受けて、平家物語の大略を、当時の話し言葉によって語る (対話形式) のものである。これがキリスト教布教のために来日した当時のイエズス会宣教師のための日本文化と、日本語学習のテキストである。

天草版平家と対比する古典平家 (屋代本・斯道文庫本・小城本・国会本・京都本・高野本・葉子十行本・流布本・中院本：九本) として使用した『平家物語』は、次のものである。

- 1 屋代本 『屋代本高野本対照平家物語』 新典社
- 2 斯道文庫本 『百二十句本平家物語』 汲古書院
- 3 小城本 『小城鍋島文庫本平家物語』 汲古書院
- 4 国会本 新潮日本古典集成『平家物語』 新潮社
- 5 京都本 『平家物語百二十句本』 思文閣
- 6 高野本 新日本古典文学大系『平家物語』 岩波書店
- 7 葉子十行本 日本古典全書『平家物語』 朝日新聞社
- 8 流布本 『平家物語』 おうふう

9 中院本 『平家物語(中院本)と研究(一~四)』未刊国文資料刊行会

なお天草版平家は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』(江口正弘 明治書院)を使用した。

2. 対称詞

最初に対称詞個々の観察の前に、諸本により表題が異なるために、天草版平家と引用例を示す古典平家四本との表題対照を表1として示す。

新しい吟味する vonore・vonorera の対称詞の比較資料を、表2として示す。

表2	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	備考
	卷第一 第三	卷第一 第三	卷第一 第十二	卷第一 第十二	卷第二 第二	卷第二 第三	卷第三 第十三	卷第四 第十四	卷第四 第十六	卷第四 第十八	卷第四 第二十六	卷第四 第二十六	
天草版	vonore	vonorera	vonore	vonore	vonorera	vonore	vonore	vonore	vonore	vonorera	vonorera	vonore	
屋代本	己レ	欠文	己レ	己レ	己レ	汝等	欠文	ヲノレヲ	汝等	己等	己等	己	欠文：該当文を欠く ノ：欠卷
斯道文庫本	己	汝等	己レ	己レ	ナンジラ	汝	己レ	己レ	己	己等	己レ等	己レ	
小城本	己等	欠文	己	己レ	ナンザラ	汝	己レ	己レ	／	／	己レヲ	欠文	
国会本	おのれ	なんぢら	おのれ	おのれ	なんぢら	なんぢ	なんぢ	おのれら	おのれら	おのれら	おのれ	欠文	
京都本	をのれ	なんぢら	をのれ	をのれ	なんぢら	なんぢ	なんぢ	をのれ	をのれら	をのれら	をのれら	欠文	
高野本	をのれら	をのれら	をのれ	をのれ	レ	なんぢ	なんぢ	おのれ	欠文	おのれら	汝等	欠文	レ：対称詞を欠く
葉子十行本	己等	己等	おのれ	己	レ	汝	レ	おのれ	欠文	己等	汝等	欠文	
流布本	己ら	己ら	己	己	レ	汝	汝ら	レ	欠文	己ら	汝等	欠文	
中院本	をのれ	欠文	此わらは	なんぢ	なんぢら	なんぢ	なんぢら	欠文	をのれら	おのれら	なんぢ	をのれ	
誰から誰に	清盛 ↓ 西光	清盛 ↓ 経遠 兼康	俊寛 ↓ 有王	俊寛 ↓ 有王	長兵衛 ↓ 出羽判官 源大夫判官	宗盛 ↓ 競	鼓判官 ↓ 木曾	重盛 ↓ 重景	義経 ↓ 揖取	能登殿 ↓ 安芸兄弟	六代の母 ↓ 高藤兄弟	六代 ↓ 犬	

さて、表2の対称詞を、本文にしたがってその出現状況を観察することにする。

天草版平家と直接本文を比較し、引用例として示す古典平家は、次のものとする。

屋代本（古態を残す語り本系の代表として）、国会本（百二十句系統本の代表として）、高野本（覚一系統本の代表として）および中院本（八坂系諸本の代表として）の四本である。

対称詞は物語の場面により、具体的に変化を見せ、対話の相手をどのように遇するかが、端的にあらわれるものである。

12例の vonore・vonorerera を、以下のように分類し、分類ごとに対称詞を吟味する。

- A. 古典平家「汝（等）」との対応を持つ天草版平家「vonorerera」：四例
 - B. 古典平家「汝（等）」との対応を持つ天草版平家「vonore」：三例
 - C. 古典平家「己（等）」との対応を持つ天草版平家「vonore」：五例
 - D. 古典平家「汝」・「己」の天草版平家における変化（俊寛→有王の場合）
- 上記の四分類順にしたがって、対称詞を観察する。

A 古典平家「汝（等）」との対応を持つ天草版平家「vonorerera」：四例

最初に、天草版・屋代本・国会本・高野本・中院本の順にしたがって、引用例を示す。

②

天草版

清盛なを腹をすゑかねて、経遠兼康と呼ばれたれば、そこえ参つたに：あの男とて庭へ引き落せと、下知せられたれども：これらさうなうもせず、かしくまって重盛の御気色なんとござらうぞと申したれば：清盛大きに怒って、よいぞよいぞ：vonorerera わ重盛が命をば重んじて、わが言うことをばかろしむるか？

屋代本

入道猶腹ヲ居カネ給テ、経遠、兼康ヲ召レケリ。難波次郎、妹尾太郎参リタリ。「アノ男取テ庭へ引落セ引落セ」ト宣ケレトモ、暫ハ畏テ候ケルカ、此事悪カリナムトヤ思ケン、大納言ヲ庭へ引落シ奉ル。

国会本

（入道なほも腹をすゑかね給ひて）「小松殿の御気色いかがあるべう候ひなん」と申しければ、「よしよし。さればなんぢらは内府が命をおもくして、入道が仰せをかるんずるござんなれ」とのたまへば、「あしかりなん」とや思ひけん、

高野本

入道なを腹をすゑかねて、「経遠、兼康」と召せば、瀬尾太郎・難波次郎参りたり。「あの男とて庭へ引おとせ」との給へば、これらはさうなくもしたてまつらず。「小松殿の御気色いか候はんず覧」と申ければ、入道相国大にいかって、「よしよし、をのれらは、内府が命をばおもうして、入道が仰をばかろうしけるござんなれ。

中院本

入道猶はらをすへかねて、なんばの二郎せのをの太郎をめされければ、つねとをかねやすまいりたり、あのをとこ、をめかせとのたまへば、かしこまで申けるは、小松殿のかへりきこしめされんところもいかゞ候べかるらんと申ば、じやうかいよりもだいふはおそろしきよなう、よしよしさきゝつ、さらば其むねをこそ心えめとの給へば、

⑤

天草版

長兵衛ものも知らぬ奴ばらが言いやうやな！馬に乗りながら庭上に参るさえ奇怪なに、下部参つてさがし奉れとわ vonorera が分でなんと申さうことぞ？

屋代本

卷四 欠卷

国会本

長兵衛、「ものも知らぬやつばらが申し様かな。馬に乗りながら庭上に参るだにも奇怪なるに、『下部ども参りてさがしたてまつれ』とは、なんぢらいかでか申すべき。

高野本

長兵衛尉これを聞いて、「物もおぼえぬ官人どもが申様かな。馬に乗ながら門のうちへ参るだにも奇怪なるに、下部共まいってさがしまいらせよとは、いかで申ぞ。

中院本

のぶつらこはいかに、物もおぼえぬくわん人どもが申やうかな、たとひ日ぼんこくをかたきにうけさせ給てうてきとならせ給はんからに、なんぢらが馬にのりながら、さうなく御にはへうち入て申だにもらうぜきなるに、しもべどもまいりて、さがしたてまつれと申こそきくわいなれ、
斯道文庫本（屋代本欠卷を補うために）

長兵衛尉・物も覚へヌ奴原カ申スヤウナ馬ニ乗りナカラ・庭上ニマイリタルモ奇怪ナルニ・下部トモ参テ・捜奉レトハ・ナンヂラ争カ申スヘキ

⑩

天草版

能登殿前に進んだ郎等を憎いやつかなとあって、海えざんぶと蹴入れ、実光をば左の脇にはさみ、弟をば右の脇にはさみ、一締め締めて、いざさらば vonorera 死出の山の供せいとあって、生年二十六でついに海に入らせられた。

屋代本

能登前司見レ之ヲ、真前ニ進ミタル郎等ヲ走向ヒ、「憎ヒ奴ノ」トテ裾ヲ合テチヤウトケ給ヘハ、海ヘタンフト蹴入ラル。安芸太郎ヲハ左ノ脇ニ挟ミ、次郎ヲハ右ノ脇ニ挟ミ、一シメシメテ、「イサウレ。サラハ汝等死出ノ共セヨ」トテ、海ヘツトソ入給フ。

国会本

(能登の前司) 太郎をば左の脇へはさみ、次郎をば右の脇にはさみ、一しめ締めて、「いざうれ。さらば、おのれら死出の山の供せよ」とて、生年二十六にてつひに海へぞ入り給ふ。

高野本

(能登殿) つゞいてよる安芸太郎を弓手の脇にとってはさみ、弟の次郎をば馬手のわきにかいはさみ、ひとしめしめて、「いざうれ、さらばおのれら、死途の山のともせよ」とて、生年廿六にて海へつとぞ入り給ふ。

中院本

(のと殿) あきの太郎をゆんでのわきに、二郎をばめてのわきにかいはさみて、上しめ三しめしめられけるが、いざ、さらばおのれら、しでの山路のともせよとて、年廿六と申には、海へぞとび入給ひける。

⑪

天草版

こころない者さえも命をば惜しむぞ、さて vonorera わなんとしようぞと、仰せらるれば：いづくまでも供つかまつり、何ともならせられてござれば、煙となしまらし、御骨をとり、高野にをさめ奉り、兄弟ともに法師になり、

屋代本

「サテ己等ハ何カセン」ト宣へハ、「我等ハ何クマテモ御供仕候テ、何ニモ成ラセ給候ハンヲ見進セ候テ、法師ニ成リ、

国会本

心なき者だにも、命をば惜しむぞかし。さておのれはいかにせん」とのたまへば、「いづくまでも御供つかまつり、何にもならせ給ひて候はば、煙となしまるらせ、御骨を取り、高野に納めたてまつり、

高野本

さて汝等はいかゞはからふ」との給へば、「これはいづくまでも御供仕り、むなしうならせ給ひて候はば、御骨をとり奉り、高野のお山におさめ奉り、

中院本

さてなんぢは、いかにはからふぞとのたまへば、これはたゞ、いづくまでも御ともつかまつり候て、いかにもならせ給候はゞ、けぶりとなしまいらせて、御こつをとりまいらせ、高野、こがはにも、

他の諸本も加えて古典平家九本と、天草版平家との対称詞整理表を示す。

A	②	⑤	⑩	⑪	
天草版	vonorera	vonorera	vonorera	vonorera	◎ 己等
屋代本	欠文		△	◎	○ 己
斯道文庫本	△	△	◎	◎	△ 汝等
小城本	欠文	△		◎	△ 汝
国会本	△	△	◎	○	レ 対称詞を欠く
京都本	△	△	◎	◎	/ 欠巻

高野本	◎	レ	◎	△
葉子十行本	◎	レ	◎	△
流布本	◎	レ	◎	△
中院本	欠文	△	◎	△

対称詞整理表 A から特に注目されるのは、次の二点である。

- ⑩能登殿から安芸兄弟への古典平家諸本の対称詞は、屋代本以外はすべて「己等」である。⑩においては、古典平家の「己等」が、天草版「vonorera」に移行していることになる。
- ②・⑤・⑪の vonorera は、古典平家諸本間に異なりが見られる。三例ともに、それぞれの特徴を見せている。

②では覚一系統本「己等」に対して、百二十句系統本「汝等」が対立し、⑪では屋代本・百二十句系統本「己等」に対して、覚一系統本「汝等」が対立している。なお⑤では百二十句系統本・中院本「汝等」に対して、覚一系統本は対称詞を用いていない。

ここで⑤長兵衛→出羽判官・源大夫判官を国会本の引用文を用いて吟味しておく。

国会本：長兵衛、「ものも知らぬ^④やつばらが申し様かな。馬に乗りながら庭上に参るだにも奇怪なるに、『下部ども参りてさがしたてまつれ』とは、^⑤なんぢらいかでか申すべき。

国会本^④・^⑤相当部分は、天草版では次のように対応している。

天草版^④ 奴ばらが言いやうやな！

^⑤ vonorera が分でなんと申さうことぞ？

④・⑤国会本の長兵衛が出羽判官・源大夫判官に対することばは、天草版では対称詞「なんぢら」を、相手を見下す気持でののしる「vonorera」に移行させているのは、順当である。

一方高野本では、^④物もおぼえぬ官人どもが申様かな。^⑤さがしまいらせよとは、いかで申ぞ。と、対称詞を欠いている。

天草版「vonorera」は、百二十句系統本「汝等」を「やつばら」の気分にのせ、「vonorera が分で」と、相手をののしる気持を表現している。

⑪の「vonorera」も、注目される。六代の母＝維盛の北の方（身分のある女性）が、身分の低い六代の従者（男性・複数）に対して用いる「vonorera」には、ののしりの気持は無い。身分上の差が著しい上位者から下位者への対称詞である。女性が用いる己等＝vonorera は、屋代本・百二十句系統本の特徴の一つである。

天草版平家に見られる vonore・ra・nangi の記述を見ておくことにする。

『日葡辞書』（1603－1604 長崎）

Vonore：お前 下賤な者と話すのに用いる。

Vonorega：同上

Vonoreme：おまえ 一層下品な言い方

Nangi：お前 文書語

ロドリゲス『日本大文典』（1604－1608 長崎）

Vonore : Vonorega Sochi 又は Sochiga

Vonorega 身分の低い者や召使等と話すのに用いる卑態

Vonore : 「論語」等に於けるが如く、敬意を表さない所の荘重な書きことばに多く用ゐる、莊重である。

Nandachi Nangira : 汝その他の者。書きことばに用ゐる、敬意は持たないで、尊大さを示す。

Ra : 複数に使はれる助辞は、Tachi Xu Domo Ra である。Ra は謙遜する場合の第一人称に用ゐる、また第二人称及び第三人称を甚だしく侮辱し軽蔑する場合に用ゐる。

Ra : Ra は Domo よりも一層低いものである。この語の添はった人や物を見下げて軽蔑する意をあらはすが、それは書きことばでは関係がないから、主として話しことばの上のことである。

ロドリゲス『日本語小文典』(1620 マカオ)

Nangi Vaga Vonore Vonorega Sochi Sochiga Vonoga Nuxi 〈お前〉奴隷・召使・自分の子といった身分の低い人に用ゐる。最後の五語はつぎに Me をおき、さらに Ga を添えることもあるが、そうしないこともある。例、Vonoreme または Vonoremega、Sochime または Sochimega

コリヤード『日本文典』(1632 ローマ)

話し相手が自分より目下の者である時の第二人称代名詞には、次の三つがある。Váre Vonóre Sòchi。もしこれらに me 又は mēgá がつけ加えられて、Váremè、Váremēgá と云った場合には、相手の人を一層おとしめているのである。

○これ等の代名詞の複数は尊敬の程度の差にしたがって、前述の助辞によって作られる。即ち Vónórē domo. Váre ra Sochi ra は卑賤な者と語る時の「汝等」を意味する。

『日本語文法大辞典』

おのれ 目下の者に対してか、相手を見下して言うときに用ゐる。相手を罵って言うこともある。奈良時代から江戸時代まで、用例が見られる。

ら ②人を表す語の後に付けて、親愛・軽視・卑下などの意を表す。

なんぢ 平安時代は対等からそれ以下の者に対して用いられ、鎌倉時代には目下の者に対する代表的な対称の代名詞として使われた。江戸時代になると口頭語の世界から消えていき、専ら文語文で用いられるようになる。

天草版平家の「Vonorerá」は、上記の記述に適合するものである。

B 古典平家「汝(等)」との対応を持つ天草版平家「vonore」: 三例

最初に、天草版・屋代本・国会本・高野本・中院本の順にしたがって、引用例を示す。

④

天草版

さのみながらえて vonore に憂き目を見しようも我ながらつれないことぢやと言うて、

屋代本

サノミ長ラヘテ己ニ憂目ヲミセンモ、我身ナカラツレナシ」トテ

国会本

さのみながらへて、おのれに憂き目を見せんも、わが身ながらつれなかるべし」とて、

高野本

さのみながらえて、をのれに憂き目を見せんも我身ながらつれなかるべし」とて、

中院本

いつまでながらへて、なんぢにうきめをも見すべきとて、をのづからのしよくじをもとめて

⑥

天草版

競わ召しにしたがうて参った。宗盛もやがて出やうて対面して、vonore わ相伝の主の三位入道の供をばせいでとまったわ、何と？子細があるかと問われたれば、

屋代本

卷四 欠卷

国会本

競、召しによつて参りたり。右大将出であひ対面し給ひて、「いかに、なんぢは相伝の主三位入道の供をせずとどまりたるぞ、存ずるむねあるか」とのたまへば、

高野本

前右大将、競を召して、「いかになんぢは、三位入道の供をばせでとまるとの給ければ、

中院本

きをふやがてまいりたり、いかになんぢは、さうでんのしゆ、三位入道が、ともをばせぬぞさん候、

斯道文庫本（屋代本欠卷を補うために）

競召ニ依テマイリタリ・右大将・出合対面シ玉ヒテ・イカニ汝ハ・相伝ノ主・三位入道ノ供ヲセス・留リタルゾ・存ル旨ノ有カト・宣ハ

⑥′（⑥に続き、下記のような展開が見られる）

天草版

年ごろ va がこのあたりを出入するをあわれ召し使わうずるものをと、つねに思うたに、さてわ幸ぢゃ：当家に奉公せいかし。

屋代本

卷四 欠卷

国会本

「年ごろなんぢがこの辺を出で入りするを、『召し使はばや』と常に思ひしに、さらば当家に奉公をいたせかし。

高野本

「抑朝敵頼政法師に同心せむと思ふ。又これにも兼参の物ぞかし。先途後栄を存じて、当家に奉公いたさんとと思ふ。ありのまゝに申せ」とこそそのたまひければ、

中院本

(なにものゝごんげんにて候やらん。めも見せられ候はず、これ程の大事に、おちゆかれ候が、かくともつけしられ候はず、さらばたうけにほうこうせよかし、) …むねもりのきやう、ねんらいあはれ、めしつかはばやとおもはれけるあいだ、さらばこれに候へとて、をかれたり、

斯道文庫本 (屋代本欠巻を補うために)

年来汝ガ・此邊ヲ出入スルヲ・哀レ・召仕ハヽヤト・常ニ思ヒシニ・サラハ・當家ニ奉公致セカシ

⑦

天草版

末代と言うても、帝王に向いまして弓を引くか？ vonore が放さうずる矢わかえって身に当らうず：抜かうずる太刀もかえって汝が身を切らうぞなどののしつたれば、

屋代本

末代ナラムカラニ、汝等夷ノ身トシテ、十善帝王ニ向進テ、争カ弓ヲハヒクヘキ、汝等カ放タン矢ハ、返テ身ニ中ルヘシ。抜ン太刀ハ、還テ汝等カ身ヲ可切」ナントソ申ケル。

国会本

末代ならんからにや、なんぢら夷の身として、十善の帝王に向かひまらせて、いかで弓を引くべき。なんぢが放さん矢は、かへりて身にあたるべし。抜かん太刀は、なんぢが身を斬るべし」なんぞぞ申しける。

高野本

末代ならむがらに、いかんが十善帝王にむかひまいらせて弓をばひくべき。汝等がはなたん矢は、返って身にあたるべし。抜かむ太刀は、身をきるべし」なんどとのゝしりければ、

中院本

こは末代といはんからに、いかでか十ぜんの君にむかひまいらせて、弓をひき、矢をはなつべき、なんぢらがはなたんずる矢は、かへりて身にあたるべし、ぬかん太刀は、帰て身をきるべしとぞ申ける。

他の諸本も加えて古典平家九本と、天草版平家との対称詞整理表を示す。

B	④	⑥	⑦	
天草版	vonore	vonore	vonore	
屋代本	○		△	
斯道文庫本	○	△		
小城本	○	△	△	
国会本	○	△	△	
京都本	○	△	△	
高野本	○	△	△	
葉子十行本	○	△	レ	
流布本	○	△	△	
中院本	△	△	△	

○ 己
△ 汝等
△ 汝
レ 対称詞を欠く
/ 欠巻

引用例および対称詞整理表 B から観察される要点を記す。

④俊寛から有王に対する対称詞は、己 = vonore である。旧主人(俊寛)から、かつての従者(有王)に対する対称詞は、身分の上位者から下位者に対する対称詞の基本形である。中院本のみ「汝」が特異に見られ、中院本の特色を示すものといえる。

⑥宗盛から競に対する対称詞は、汝 = vonore の関係を示し、⑦鼓判官から木曾の対称詞は、汝・汝等 = vonore の関係を示している。己 = vonore となる関係を、⑥および⑦においては、古典平家諸本間に見いだすことができない。

先ず⑥から吟味を行うことにする。

宗盛から競に対する対称詞は、天草版平家では「vonore」であり、古典平家諸本では屋代本の欠巻を除く八本は「汝」である。vonore も汝も、目上から目下に対する対称詞ではあるが、天草版平家では「汝」を「vonore」に変えている。

さらに⑥の後出にも、宗盛から競への「汝」が用いられている。百二十句系統本では「汝」、覚一系統本・中院本では欠文となっている。⑥'として天草版・斯道文庫本(屋代本欠巻を補うために)・国会本・高野本および中院本の引用例は既に示してある。

他の諸本も加え、古典平家九本と天草版平家との対称詞整理表を示す。⑥と⑥'を比較のために一緒に示す。

	⑥	⑥'
天草版	vonore	va
屋代本		
斯道文庫本	△	△
小城本	△	△
国会本	△	△
京都本	△	△
高野本	△	欠文
葉子十行本	△	欠文
流布本	△	欠文
中院本	△	欠文

引用例および作表から観察される主要な点は、次のものである。

古典平家⑥宗盛から競への対称詞は「汝」であり、⑥'の宗盛から競への対称詞は「汝」(百二十句系統本)である。覚一系統本・中院本では、当該箇所は欠文である。したがって、あい前後して古典平家では宗盛から競に対して二度、「汝」が用いられていることになる。しかし天草版平家では、前出の「汝」は「vonore」に、後出の「汝」は「va」に変えられ、天草版平家には「nangi」が見られない。古典平家の「汝」は、一方では vonore に、他方では va に変えられていることになる。

「va」については、ロドリゲス『日本大文典』には、「vonuxi vaga 身分の低い者や召使等と話すのに用いる卑態」とあり、『日本語文法大辞典』には、「わ 二人称 相手を親しんで、また、卑めていう時に用いる。」とある。

宗盛→競の対称詞「va」は、「年ごろ va がこのあたりを出入するをあわれ召し使わうずるもの」と、つねに思うたに、さてわ幸ぢゃ：当家に奉公せいかし」と親しみを持つ「va」である。

口語性豊かな、くだけた口調の vonore・va を用いることにより、「汝」では表現しきれない宗盛から競への親近感を表出している。「汝」を、vonore・va に変えるのは、天草版平家における対称詞の多様化のあらわれといえよう。これは天草版平家の編者不干ハビヤンの『平家物語』の深い吟味による読みとりと、当時の口語に対する鋭敏な分析によるものと推測できる。

⑦で注目されるのは、対称詞の古典平家から天草版平家への移行にある。

前述の⑥では二例の「汝」は、天草版平家では「vonore」と「va」に変わり、「汝」は「nangi」として残ることはなかった。vonore・va が、「汝」では担いきれない宗盛から競への親近感を表出していた。二様の対称詞 (vonore・va) は、当時の口語における多様化を示すものである。

⑦においても、古典平家から天草版平家への対称詞の移行が見られる。

国会本と天草版の例をとりあげてみる。

(国) なんぢが放さん矢は、かへりて身にあたるべし。抜かん太刀はなんぢが身を斬るべし

(天) vonore

nangi

前出の「なんぢ」は「vonore」に変わるが、後出の「なんぢ」は、変わることなく「nangi」である。山田孝雄『平家物語の語法』には、「この時代の代名詞にして、純粹の対称と目すべきものは「汝」なり」とあり、『日本国語大辞典』には、「「なんぢ」は中世以降は、目下の者に対するもっとも一般的な代名詞」とある。nangi の安定度の確かさを見せている

C 古典平家「己(等)」との対応を持つ天草版平家「vonore」：五例

最初に、天草版・屋代本・国会本・高野本・中院本の順にしたがって、引用例を示す。

①

天草版

清盛大床にたつて、この一門を傾けうとするやつがなつたざまわ！しゃつここえ引き寄せよとゆうて、縁の際に引き寄せてもの履きながら、しやつらをむずむずと踏んで言わるるわ：もとより vonore がやうなる下臈の果てを君の召し使われて、なさるまじき官職をくだされ、父子ともに過分の振舞いをすると

屋代本

入道怒テ、「シヤツ、コゝエ引寄ヨ」トテ、梃際ニ引寄サセ、「天性己レカ様ナル下臈ノ終ヲ、君ノ召仕ハセ給テ、成ルマシキ官職ヲナサレ、父子共ニ過分ノ振舞シテ、

国会本

入道いかつて、「しやつ、ここへひき寄せよ」とて縁のきはへひき寄せさせ、「天性おのれが様なる下臈のはてを、君の召しつかはせ給ひて、なさるまじき官職をなし、父子ともに過分のふるまひして、

高野本

入道相国大床に立って、「入道かたぶけうどするやつがなれるすがたよ。しやつこゝへひきよせよ」とて、縁のきはにひきよせさせ、物はきながら、しやつつらをむずむずとぞ踏まれける。「本よりのをのれらがやうなる下藤のはてを、君の召しつかはせ給ひて、なさるまじき官職をなしたび、父子共に過分のふるまいひすると見しにあはせて、

中院本

入道中門に出給て、じやうかいをほろぼさんとせしやつばらが、なれるすがたのおもしろさよ、しやつこゝへひきよせよやとて、ひきよせさせ、まづむちをもて、心のゆくゆくうてのたまひけるは、やれをのれがやうなる下らうのはてを、君のめしつかはせ給ひて、なさるまじきくわんしよくをたび、ふしともにくわぶんのふるまひせしやつとみしにあはせて、

③

天草版

これ見よこの子が文の書きやうのはかないことよ：vonoreを供にして急いで上れと、書いたことこそうらめしい：

屋代本

「是見ヨ有王。此、姫カ文ノ書様ノハカナサヨ。心ニ任セタル俊寛カ身ナラハ、何トテカ三年ノ春秋ヲハ送ヘキ。ウチマカセテノ田舎下ナントノ様ニ、己レヲ共ニテ急キ上レト書タル事ノ恨、シサヨ。

国会本

「これ見よ、有王よ。この子が文の書き様のはかなさよ。おのれを供にのぼれとは、心にまかせたる俊寛が身ならば、いままでなにとてこの島にて三年の春秋をはおくるべき。

高野本

「是見よ有王、この子が文の書やうのはかなさよ。をのれを供にて急ぎのぼれと書たる事こそうらめしけれ。

中院本

見しよりも手もいとよくかきたり、ことばつゞきもとなしけれ共、たゞしはかなき事をもかきたるものかな、此わらはをともにてのぼれなど、かきたる事のあはれさよ。

⑧

天草版

今度の除目に鞠負の尉にないて、vonoreが父景康を呼うだやうに、召し使わうと思うたに、かうなることわくちをしい：

屋代本

重景ヲ近フ召テ、汝ハ小松殿ノ御方ニ候テ、相構テ能々宮仕ヒ申セ。

国会本

今度の除目に鞠負の尉になして、おのれらが父景康を呼びし様に召し使はばやと思ひしに、

高野本

今度の除目に、鞠負尉になして、おのれが父景康を呼びし様に召さばやとこそ思ひつるに、

中院本

しげかげは、少将殿の御かたに候て、みやづかひつかまつれ、あひかまへて、御心にたがうなと、さいごのおほせにも候き、

⑨

天草版

かなうまじい由を申せば：義経怒って、勅宣を承って、頼朝の御代官として、平家追伐に向う義経が下知をそむく vonore こそ朝敵よ：野山の末、海川で死ぬるも、みな前業の所感ぢゃ。

屋代本

判官怒テ、「奉_レ勅宣ヲ、鎌倉殿ノ御代官トシテ、平家追討ニ罷向義経カ下知ヲ背クヲノレラコソ朝敵ヨ。野山ノ末、海河ニテ死ルモ、皆前業之所感也。其儀ナラハ、シヤツ原一々ニ射殺セ」トソ宣ケル。

国会本

判官怒って、「勅宣を承り、鎌倉殿の御代官として、平家追討にまかり向かふ義経が下知をそむくおのれらこそ朝敵よ。野山の末、海川にて死するも、みな前業の所感なり。その儀ならば、奴ばらいちいちに射殺せ」とぞのたまひける。

高野本

判官おほきにかつての給ひけるは、「野山のすへにて死に、海河のそこにおぼれて失するも、皆これせんぜの宿業也。

中院本

判官、あんぜんをうけたまはりて、平家ついたうのために、むかふ義経が、下知をそむくをのれらめこそ、てうてきよ、いかなる野山の末、海川にて死ぬるも、ぜんせのしよごうなり、其ぎならば、しやつばら一々にいころせとのたまへば、

⑩

天草版

さらはありし松原でとにもかくにもならうずるものをと泣かせられたところえ、若君の飼わせられた狗の築地のくづれから走り出て、尾を振って向うたれば：vonore わいるか！人わいづくえぞと問われたにぞせめてのことであった。

屋代本

(エノコ) 声ヲ聞知タリケルヤ覽、築地ノ崩レヨリ走り出テ、尾ヲ振悦テ向ヒタリケレハ、六代御前、「何ニ己ハ有ケルヤ。人ハ何チヘソ」ト問レケルニソ、「責テノ事哉」トテ、人々袖ヲヌラシケル。

国会本

狗の子が走り出でて、尾をふりて迎ひけるに、「母上はいづくにましますぞ」と、問ひ給ひけ

るこそせめてのことなれ。

高野本

しろいゑのこのはしり出て、尾を振ってむかひけるに、「母うへはいづくにましますぞ」とはれけるこそ、せめての事なれ。

中院本

年比かはせ給ひけるいぬ、若君の御こゑをきゝしりまいらせたりけるにや、いかにをのれはありけるや、人々はいづかたへぞととひ給へども、こたへ申さず、せめての御事にやとぞみえ給ふ。

他の諸本も加えて古典平家九本と、天草版平家との対称詞整理表を示す。

C	①	③	⑧	⑨	⑫
天草版	vonore	vonore	vonore	vonore	vonore
屋代本	○	○	欠文	◎	○
斯道文庫本	○	○	○	○	○
小城本	◎	○	○	/	
国会本	○	○	◎	◎	欠文
京都本	○	○	○	◎	欠文
高野本	◎	○	○	欠文	欠文
葉子十行本	◎	○	○	欠文	欠文
流布本	◎	○	レ	欠文	欠文
中院本	○	此わらは	欠文	◎	○

引用例および対称詞整理表Cから観察される要点を記す。

③俊寛から有王への対称詞 ⑧重盛から重景への対称詞 ⑫六代から犬への対称詞は、それぞれの出現状況に違いはあるが、目上から目下に用いられる「己= vonore」であり、対称詞の基本形である。

①古典平家の清盛から西光への対称詞「己等」(覚一系統本)が、天草版平家では「vonore」に変わる点、同じく⑨義経から揖取への対称詞「己等」(屋代本・百二十句系統本・中院本)が、天草版平家では「vonore」に変わる点が注目される。①・⑨は同じパターン(己等→ vonore)である。①をとりあげ、吟味を行うことにする。

①の清盛から西光へ用いられる対称詞「己等」が、天草版平家で「vonore」となる変化を、文脈を追って見ることにする。

	天草版	屋代本	斯道文庫本	小城本	国会本	京都本	高野本	葉子十行本	流布本	中院本
入道怒テ		○	○	○	○	○				
この一門を傾けうとするやつがなつたざまわ!	○						○	○	○	○
しゃつここえ引き寄せよ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

もの履きならがしやつらをむ ずむずと踏んで	○						○	○	○	まづむち をもて
vonore がやうなる下臈の果 てを	○	○	○	己等	○	○	己等	己等	己等	○

上記の表から覚一系統本が清盛から西光に対して「己等」を用いる理由を理解できよう。高野本による文脈は、次のようである。「入道かたぶけうどするやつがなれるすがたよ」・「しやつこゝへひきよせよ」・「物はきながら、しやつらをむずむずとぞ踏まれける」・「本よりのれらがやうなる下臈のはてを」

これら一連の表現から、清盛の西光への怒りは、「己」＋「ら（軽視の意を表わす。また、はなはだしく軽蔑する）」＝「己等」がふさわしい。天草版では覚一系統本の憎しみに満ちた表現を踏襲しているが、対称詞は「己等」をうけつがず、vonore にとどめている点が特筆できる。なお屋代本・百二十句系統本（平仮名本）では、覚一系統本のような憎しみに満ちた表現ではなく、素朴な表現である。したがって「己」相当といえる。

D 古典平家「汝」・「己」の天草版平家における変化（俊寛→有王の場合）

最初に、天草版・屋代本・国会本・高野本・中院本の順にしたがって、引用例を示す。

③・④の補足（対称詞の多様化）

nangi・sonofō

天草版

多くの波路をしのいでこれまでたづね参ったかいもなう、やがて憂き目を見せさせらるるかど、泣く泣く申したれば：ややあってすこし人心地ができて、助け起こされて、まことにnangiがこまでたづねくるころざしのほどわ、近ごろ神妙な：明けても、暮れても都のこののみが思いだされ、…さればsonofōがきたことも、ただ夢とばかり思う

屋代本

良有テ少シ心付テ、扶起サレ給テ、「サテモ汝カ是マテ尋下ケル志コソ難」有ケレ。…サレハヲノレカ来ルモ、只夢トノミコソ覚レ。

国会本

ややあつて、僧都、すこし人ごころ出て来て、たすけおこされ、のたまひけるは、「さればとよ。去年少将、康頼入道がむかひのときも、その瀬に身をも投ぐべかりしを、よしなき、少将の『いかにもして都のおとづれを待てかし』となぐさめおきしを、

高野本

やゝあつてすこし人心ち出き、たすけおこされて、「誠に汝が是まで尋来たる心ざしの程こそ神妙なれ。明ても暮ても、都の事のみ思ひるたれば、…されば汝が来れるも、ただ夢とのみこそおぼゆれ。

中院本

○欠文(注) 場所を変えて、同文あり。

なんぢがこれまでたづねきたりたる、心ざしの程こそしんべうなれ。

…なんぢがたゞいまきたりたるをも、たゞゆめにのみこそおもへ、

sochi

天草版

して去年少将や、成親が迎いにもかれらが文と言うこともなし：今また sochi の便りにもおとづれのないわこうとも言わなんだか？

屋代本

「サテモ有王。去年少将や判官入道ノ迎ヘノ時モ、是等カ文ト云事モナシ。今己レカ便ニモ音信之ナキハ、カウトモイハサリシカ。

国会本

「少将、康頼入道がむかひのときも、これらが文といふこともなし。ただ今なんぢがたよりに、おとづれのなきは、かくとも言わざりけるか」

高野本

「抑去年少将や判官入道が迎へにも、是等が文と云事もなし。今汝がたよりに、音づれのなきは、かう共言はざりけるか」。

中院本

いかに二人の人々のむかへの時も、一さつをことづくるものなかりしぞ、又なんぢがきたれ共、なにもをとづれのなきは、人々に此よしいはざりけるかとの給へば、他の諸本も加えて古典平家九本と、天草版平家との対称詞整理表を示す。

D	俊寛→有王		
天草版	nangi	sonofō	sochi
屋代本	△	○	○
斯道文庫本	△	○	○
小城本	△	○	○
国会本	欠文	欠文	△
京都本	欠文	欠文	△
高野本	△	△	△
葉子十行本	△	△	△
流布本	△	△	△
中院本	(△)	△	△

(△) 場所を変えて同文あり。
なんぢがこれまでたづねきたりたる、心ざしの程こそしんべうなれ。

引用例および対称詞整理表 D から観察される要点を記す。

○ nangi・sonofō

鬼界島から都へ帰れない俊寛を有王が島へ訪れ、方々探しまわりとうとう劇的な再会をする感動的な場面で、俊寛から有王に用いられる対称詞は、古典平家には「汝・己」、天草版平家には「nangi・sonofō」が見られる。古典平家諸本ではこの場面を欠文とする国会本・京都本を除けば、すべて俊

寛から有王へ用いられる最初の対称詞は「汝」である。天草版平家においても同じく「nangi」が用いられる。俊寛の旧主としての威厳をとりつくりとする姿を「汝・nangi」が見せている。

俊寛のことは更に続き、国会本・京都本は前文と同じく欠文であるが、古典平家諸本間では、「己・汝」の俊寛から有王に対する対称詞が見られる。「己」を用いるのは、古態を残す語り本系の屋代本および百二十句系統本（漢字・片仮名交り本）の斯道文庫本・小城本である。一方覚一系統本・中院本が用いる対称詞は「汝」であり、古典平家諸本間に、対称詞使用の異なりが見られる。天草版平家では古典平家の「己」でもなく、「汝」でもなく、「sonofō」が用いられている。

注目されるのは、古典平家諸本間の俊寛から有王への対称詞に、「己」対「汝」の異なりが見られること、および天草版平家では唯一の使用例である新しい「sonofō」が用いられていることである。sonofō についての記述を見ておくことにする。

『日葡辞書』sonofō あなた ロドリゲス『日本大文典』には、sonofō は sonata conata と共に、丁寧で、広く行はれる とあり、コリヤード『日本文典』には、同等の人又は幾分目下の人と語る場合には、sònata sònofò váresáma の中の一つを用いる とある。

天草版平家では最初の俊寛から有王に対する対称詞は、古典平家と同じ「nangi」であるが、続く対称詞を新しい「sonofō」に変え、対称詞の多様化を見せている。nangi、sonofō と、俊寛が有王に対して用いる対称詞は、幾分丁寧であり、対面を受け入れる俊寛の旧主としての心情が反映されている。

○ sochi

思いのたけを一気に語った俊寛は、「ここで何事をも言わうと思えども、まづいざわが家え」と、有王をいざない、更に俊寛は語り続ける。この場面で用いられる古典平家の対称詞は「己・汝」であり、天草版平家に用いられるのは、「sochi・(vonore 既述③・④)」である。古典平家諸本間に対称詞使用の異なりが見られる。天草版平家の対称詞は「己」でもなく、また「汝」でもない。『日葡辞書』sochi お前 身分の低い者に向かって言う とある「sochi」が用いられている。

天草版平家における俊寛から有王への対称詞の新しさに注目すると、sonofō・sochi が加わり、対称詞の多様化が注目される。相手へのくだけた親しみやすさを持つ「sochi」は、俊寛のかつての従者への親しさ、くつろぎ感を反映している。

3. おわりに（まとめとして）

これまで述べてきたことの要旨を簡条書きにして、まとめておく。天草版平家と古典平家九本との、対称詞「VONORE (RA)」を吟味したものである。

1 天草版平家物語には、その場に最もふさわしい対称詞が選択されている。

古典平家物語では、「己（等）」・「汝（等）」の対称詞のみで遇されるが、天草版平家物語では、各場面で「己・汝」では表現しにくいニュアンス豊かな変化に富む対称詞が用いられている。va には宗盛から競への親しみ、sonofō には俊寛から有王への軽い敬意を、sochi には同じく俊寛から

有王へのくだけた親しき等を含め、相手との関係・微妙な心理変化を新しい対称詞に託している。

2 nangi・vonoreの基本対称詞に加えて、新しい対称詞を配置することにより、対称詞の多様化がもたらす日本語の豊かな表現は、日本語学習の効果をあげることに繋がる。各場面を支える対称詞の配置には、編者不干ハビヤンの『平家物語』への深い理解・当時の口語に対する注意力・分析力がはたらいている。細心の配慮が払われた『天草版平家物語』は、日本語・日本文化の学習テキストとしての必要要件を備えている。

3 古典平家物語諸本間の対称詞の用いられ方から、諸本の特徴を見ることができる。屋代本・百二十句系統本(漢字・片仮名交り本、平仮名本)・覚一系統本・中院本の特色が、対称詞使用の対立から把握できる。

参考図書

- 原美子・春田宣・松尾葦江編(1990)『屋代本高野本対照平家物語』新典社
斯道文庫編(1970)『百二十句本平家物語』汲古書院
島津忠夫・麻生朝道(1982)『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院
水原一(1979)『平家物語上・中・下』新潮日本古典集成 新潮社
高橋貞一(1973)『平家物語百二十句本』思文閣
梶原正昭・山下宏昭(1991・93)『平家物語上・下』新日本古典文学大系 岩波書店
富倉徳次郎(1949)『平家物語上・中・下』日本古典全書 朝日新聞社
梶原正昭(1984)『平家物語 改訂版』おうふう
高橋貞一(1961・62)『平家物語(中院本)と研究一〜四』未刊国文資料刊行会
江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院
土井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店
土井忠生訳(1969)『ロドリゲス日本大文典』三省堂
池上岑夫訳(1993)『ロドリゲス日本語小文典上・下』岩波文庫
大塚高信訳(1957)『コリヤード日本文典』風間書房
山田孝雄(1911)『平家物語考』勉誠社
山田孝雄(1914)『平家物語の語法』宝文館
室町時代語辞典編修委員会編(2000)『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂
日本国語大辞典第二版編集委員会(2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館
山口明穂・秋本守英編(2001)『日本語文法大辞典』明治書院
大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編(2010)『平家物語大事典』東京書籍
市井外喜子(2000)『天草版平家物語私考』新典社
市井外喜子(2005)『天草版平家物語私考 続』新典社

(2014年9月26日受理)